

DIO様とぶっ飛び少女ハナコちゃん

ふろんていあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本でやらかしにやらかした女の子ハナコちゃん。

警察に追われて、父の残した手紙のディーアイオー（本人はラジオネームかなんかだと思ってる）さんを頼りにエジプトに密入国する。

しかし、皆様お察しディーアイオーさんは吸血鬼なので女子高生などただの餌くらいにしか思っていないのですが、そこでナイスタイミングに館の執事テレンスがオーバーワークが原因のぎっくり腰になってしまった。

このチャンスをもノにできるか…!?ぶっ飛び少女ハナコちゃんの運命は如何に………!!!

※最終的にはメイドになったぶっ飛びハナコちゃんがへっぽこDIO様とハートフルボッコしながら過ごす1年のお話です。

目次

第1話

私はその日、なんだか朝から胸騒ぎがすると思った。

なんでこんな気持ちになるのだろうかと思うたけれど、別に今日が特別な日というわけじゃあ無いし、いつも通り、6時に起きてご飯食べ、歯とか顔とか髪とかやって家を出た。朝からシユークリーム食べて家を出た……………

いつもと違うことといえば、お友達のイチコちゃんがジョウタロウ君がうんたらかいたら……………ジョウタロウ君と言うのは同じクラスの子の名前であり、我が校の王子様の名前である。

イチコちゃん曰く、雄々しい肉体と知的なグリーンの瞳がたまらない！らしいが、正直言ったら私にはジョウタロウ君もジローラモ君もジョンソン君も変わらない。さらに言えば、これは個人的な意見なのだが、私の父は寡黙な男で全然話してくれないから、私は将来絶対に寡黙な男とは結婚しないと誓っている。

……………付き合っている時だけだ。そういうのは付き合っている時だけクールに感じて、本当に結婚して子供が生まれたら苦労するのだ。

「ハナコちゃん聞いているの？今日ジョウタロウ君が来る日なのよ！頑張って待ち伏せすれば、取り巻きの子達よりも早くジョウタロウ君に会えるのよ〜！」

「イチコちゃん…どうせジローラモ君には取り巻きの子たちがもう居るって…」

「ジローラモ誰よ、ジョウタロウよ！」

「はいはい、ジョウタロウ君ね。」

この子とは一年生の時からの付き合いだ、ちよつとお馬鹿な、頭の弱い女だ。

真に馬鹿な女とは、他人に迷惑をかける厄介な女の事である。

「ハナコちゃんジヨウタロウ君かつこよかつたね〜！」

「そうね。」

「やっぱり取り巻きの子たちには敵わなかったけど、絶対コツチ見てくれたわよ〜！」

「そうね。」

イチコちゃんは頭はゆるゆるだけど、明るくて友達思いなところは好きだし、何やかんや言つてこの子は感覚の鋭い女である。

「でもちよつと、取り巻きにヨウコちゃんがいたから……………何かされないか心配だなあ…」

「そうかしら。」

所詮私たちはカースト下位の人間である。ジローラモ君にくっ付いているのは上位の人間たちだ。

イチコちゃんは天然で嫌われてるし、私は気味の悪い女だと思われるため、時たまじめの対象になるのである。最近イチコちゃんに目をつけているのがヨウコという女で、昨日の席替えで私がジローラモ君の隣になったから、私も目をつけられている。女というのはあるめんどくさい生き物である。

人生なにが起こるか分からないと言うのはこの事で、私の人生はたった今転機を迎えている。今、つまりNOW。

それは距離にして日本列島よりも長い。どんだけ転がってんだと。ちよつといい方向に向かつている気がしない。このまま私は人攫いにもあつて、きつたねえ男どもの性奴隷にでもなってしまうんじゃないか、というか、身包み剥がされそうだ。怖い、同行者は浮かぶ胎児だ。屈強な男だったら少しは安心できたかも知れないが、そんなうまい話ではない。

突然なのだが……………私は今エジプトに居る。

いや、おい、お前さつきまで日本にいたよな？女子高生一人でエジプトに来てどうするんだよと、というか、どうやって来たんだよとい

う疑問に今からお答えするからちよつとまってくれ。

いまからだ。

………時は5日前に遡る。

私は友人であるはずのイチコちゃんに自宅の場所を売られ、たまたま家が近かったのでヨウコちゃんの鬱憤ばらしの相手に定められてしまった。

「それが全ての原因だ。

私、実は1年前に父親と母親と引きこもりデブの兄を計画的に殺している。

この三人の死体は完璧に処理したが、弟の死体だけは残っている。なので、部屋に上がり込まれるというあの状況は、非常ににまづかったのである。

ここで私の身の上話を話したいと思う。

私の家はアパートの角部屋で、酒乱の父と精神的に問題のある母親とストレスゆえの爆食いからの引きこもりメタボな兄とともに生活していた。

幼少期はゴキブリの混ざった食事とゴミ袋だらけの異臭の中で育った。

とてつもなく臭いので私のあだ名はウンコだったし、家の隣と真下には誰も住もうとしない。その辺の犬のウンコ食えって言うイジメにもあったし、ウサギ小屋の水を飲まされたこともあった。そう言う奴らは中学上がった時に、給食のカレーにカエルの内臓と猫のウンコとアヘン混ぜてやった。もちろん私は食わなかった。

………つまり何を言いたいかというと、私は特殊な家庭環境により、精神的に問題がある女性に育ってしまったと言うことである。

12歳になる頃には父は私に性的な視線を送るようになり、母は私のまつ毛を抜いて目玉のオブジェと魔法陣の手拭いに捧げるようになった。

兄はハーブやってる。百円玉がないと黒電話とポストの結婚式に出れず、肝臓にマンダラキノコを植えつえられるらしいので百円をあげていた。

その辺で私は、この家族の保護がなくても生きていけるといえるのか、私が生かしているようなものだぞ、と気付いたので、家を飛び出した。が、補導されたので、家から家族を排除してしまおうと考えた。

…そんな矢先、どっか行つてた父が大金を持って家に帰つてきた。父が持つてきた大金によつて我が山田家は少し潤つた。それでも、あいも変わらずバカしかいないので私はパクった金でホームレスのような生活をした。シャワーを浴びたい時は銭湯に行った。

私にとっては実家に比べればとてつもなく平和で清潔な日々であつた。

だから家族を排除するの、ちよつと後でもいいかな？つて気持ちになつたのである。

………で、そんな生活がなぜ家族殺害という急変を迎えたかというと、それは、母の妊娠である。

それを知つた時、私には何かよく分からない物が込み上がった。母のお腹に宿つた命、私が守らなくてはと謎の使命感が湧き上がった。それは、イカレ女の母がお腹をさすつて笑つていたからかもしれないし、裁縫をして赤ん坊の服を作つていたからかもしれない。

大きくなつた母のお腹を撫でた時、ハナコの時もこうだったのよ、あんたの兄弟よ、ハナコお姉さんになるのねえ………と、母は私の名前を呼んだのである。その時、母が物凄く清らかに感じ、また、私は愛されて生まれて来たのだと自覚した。

そこからの行動は早かつた。

母が臨月に入ると私は酒に睡眠導入剤を入れて眠つていられる父を刺し殺し、爆音でイヤホン聴いてる兄の首を縄で締め殺した。

それからは2人を金槌やら、ノコギリやらでバラバラにしてスパイヤら醤油やらをブチ込み、圧力鍋で茹でて、最後はゴミ収集車に任せた。我が家から血痕が出ないようにとブルーシート引いたりだとか大変だったが、これで何も心配いらないと私は安心したのだった。

さて、いよいよ母の出産………と、なりたいのだが、ちよつとしたアクシデントが起こつた。

赤ん坊が生まれないのである。

私は2年弟を待って、痺れを切らして自己流帝王切開を実行したら、母が死に、やつと取り出した弟は腐っていた。

あんまりに酷いので、私は母の死体は近くの山に埋めて弔い、弟は諦めきれないのでクーラーボックスに入れて置いた。

その、弟腐ってた事件はつい3ヶ月前のことである。

まあそんなこんなで、家に押しかけてきた女子4人に私は取り押さえられ、暴行を受けたのち、弟を見られてしまい、衝動的にヨウコやらを3人仕留めたが、最後の最後で1人に逃げられ、警察に通報されたのである。

これは国外逃亡するしかないと腹を決めたのは、1年前に父を殺してから途絶えたディーアイオー（ラジオネーム??）さんという人物からの手紙である。巨額の金はこの男からのようで、エジプトと日本の中継を父のスタンド（?）がしていて、案外重宝されていたらしく、うんたらかんたら………そこで触っていなかった父の机をあさったら、なんとエジプトのとある座標が精密に書かれたメモ書きや、でっかい屋敷の写真が出てきた。

私はピン！と来た。よし、ここで雇って貰えばいいじゃないかと。あの酒乱が雇ってもらえたのだから、私なら楽勝だ！と。

なんだか物凄くハイになっていた。

それからは早かった。

エジプトに行つてやろうとすぐに空港に向かった。凄くバカなのだが、私はこの時チケットやら何やら全く考えておらず、荷物もボストンバックに下着と何故か制服を冬夏全部突っ込み、乾パンを突っ込み、サバイバルナイフ：ではなく包丁を突っ込み売れそうなダイヤ？みたいなキラキラしたものをつっ込み、物凄くアホなのだが凄く満足して家を出た。

しかし…私は何故か空港を素通り出来て、エジプト行きの便に飛び乗れた。隣のシートに座っていたハンサムガイは自然に握手を求めて来たし、機内食も普通に配られた。

そこまで来て私は流石におかしいと思いはじめた。

そういえばパスポートだって持っていないんだぞ私は……………

ラッキーというにはおかしすぎる現状に私はキョロキョロと機内を見回した。気が気でなかったから脳汁出すぎてたのか、ハイになりすぎてノリで飛行機に乗ってしまっているけふこのころ………

すると、どこからか赤ん坊の声がした。真剣に耳を済ませてみると、なんと、上から聞こえてきるのである…

怖くて如何に凶太い私であろうとすぐに上を向けなかった。仕方ないので私は隣のナイスガイに尋ねた。これでも私、英語は学年十位以内の中々に頭の良い女であるはずなのだ。

「すみません、私の頭上に何か居ませんか？」

「…？ いいえ、何も居ませんが、虫か何か見たのですか？」

「………ありがとうございます。大丈夫です。」

隣の男性は何も居ないよと言うのでそれを信じて私は自分の真上を見た。

『オギャヤヤアアアア!!』

いた。

間違いない。

その赤子は今まさに母親の胎内から生まれ落ちたかのように血に塗れて、それが私の顔に垂れている。また、私の手には何かを握っている感触がある。それは赤ん坊から垂れ下がっているへその緒だった。ヌルついていて気持ちの悪い………赤ん坊は風船のようだった。泣き声は私にしか聞こえておらず、姿も私にしか見えていないようだ。風に揺られているのかゆらゆら踊っているようである。

私はもう一度ナイスガイにこの子が見えていないか尋ねるために、彼に話しかけようとした。

「うっ、な、な、なんだこれは…」

青年は両方の黒目がくるくる回っており、何かぶつぶつ言いながら髪の毛を抜いていた。

「駄目だ………ストロブの虹色の炎が消える前に運動会で一等賞を取らないと僕に明日は無いし、フィリピンにいる僕の弟と妹の子供にウエルカムドリンクを用意するために鈴虫の親子に連絡しないと…ゴキブリを混ぜた中華料理店で働きたくなかったらイカレ坊主の葬

式の助手をするのが条件つてもんさ…アツアツアツアツ、もう駄目だっ!!隣の家がミートボールを温めているっ!!殺される!!アツアツアツアツ、助かったぞ、奥さんが孕んでいたのは子供との子じゃなくて火星人のお爺さんだ……」

叫びたいのはこつちよ!!!

怖いのよ!!!

なに言ってるんだこいつ……!!!

まるで兄みたいに、やばい薬でもやってるかのような眩きだ。

頬には紅葉のような小さな赤ん坊の手形が墨のように黒くペイント?されていた。赤ん坊からまた血が垂れて来た。今度は青年のおでこにかかった。そうするとまた黒い手形が浮かび上がって来た。青年は小刻みに痙攣を始め、皮膚が黒く染まり始めた。

「……………もしかして、全部この子がやっていたの…?私が空港に入れたのも…この人が…こんなふうになったのも…全てこの子の魔法のようなものなの?」

まさに驚き。脳がガンガンしている。しかし、この私には何の効果も現れておらず、まるで守護されているかのような心地でもある…

全て黒く染まったのか、そこから男性は縮んでいき、黒い赤ん坊になって血みどろの赤ん坊の隣に浮いた。へその緒は二股になり、今後黒い赤ん坊が増えたら百股、千股にもなるのだろうか…

恐ろしい赤ん坊であることには間違えないのだが、私はどうにもこの子を殺す気にはなれなかった……そうしたら自分を否定することになるような、いや々な感じがしたのだ…

血みどろの赤ん坊は私の方を見つめて、それからキャツキャと笑った。黒い方は目も口も分からなかった。

私はちよつと、おかしくなっているのでおそるべきプラス思考を展開した。

この子は守護霊かも知れない!!

神様が授けてくれた弟かも知れない!!

エジプトに行きなさいって神様がいつてる!!

「あなたがどこの子か…私には分からないけど………神様が、私

にくれた…弟の代わり、かも知れないから…大切に…その力でお姉ちゃんを守ってね…」

『キヤツキヤツキヤツ』

それに応えるかのような赤ん坊の笑みに私は気絶した。

それからは寝て寝て寝て……エジプトの空港はまた幻覚を見せる赤ん坊の魔法で乗り切ったのだった。

そして私は今、父の手紙にあった座標を目指して進んでいる。

母国に戻るつもりはない。ただ一つ気になることといえ、私の大好きな美術の授業が今日の5時間目にあつたと言ふことだ。

スケッチブックを持ってくれば良かったと幾分か後悔している。